

清く高く見事に希望の大世界を進み抜く

—青少年健全育成祈願碑—

「季刊あおもりのき」の第14号（夏号）で、合浦公園の特集記事を見て、当社施工の棟方志功さんの記念碑がのっていたのでご紹介します。

「清く高く見事に」、そして「希望の大世界を進み抜く」志功さんの雄大な意気込みが伝わります。53才でヴェネツィア・ヴィエンナーレで日本人として版画部門で初となる国際版画大賞（グランプリ）を得た7年後、1963年（昭和38年）合浦公園に青森青年会議所が設置。



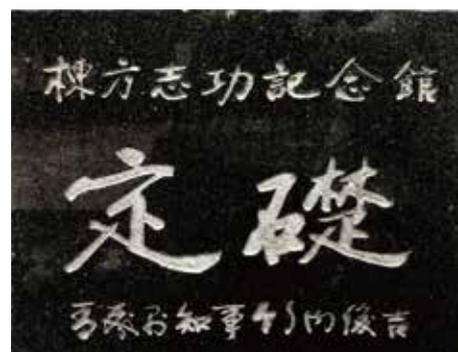
合浦公園 1963年（昭和38年）
書-棟方志功 建立-青森青年会議所
岩手県産白御影石 揮毫ブロンズ嵌め込み



私事です、当社の先代番地堅氏が30才の時、この石工事を依頼されました。合浦公園に記念碑建てる？青少年育成の事業？棟方志功？清く高く見事に希望の大世界を進み抜く？こんな奇特的な活動をする若者たちがいるのかと驚きそして嬉しくなり、その縁で青森青年会議所に入会したと聞いています。

この碑を見て思い立ち、久しぶりに青森市松原にある棟方志功記念館へ行きました。石組みの塀を過ぎると日本庭園、今時には珍しくきちんと水を流す池があり、

植樹の手入れもしっかりしています。階段を上ると受付左で映画を上映中でした。（彫る - 棟方志功の世界, 38分, 毎日映画社, 1975年製作）

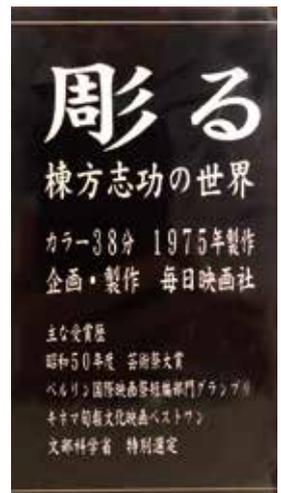




棟方志功さんを知ってはいましたが、軽い知識だけでした。世界で賞をとり、青森市名誉市民、文化勲章受賞。奇抜な構図、派手な色彩、不思議な仏教思想の表現だなというくらい。それが私も歳をとり、ふと街で作品を目にすると、だんだんとその素晴らしさを感じるようになりました。映画で製作の姿を観て、改めて棟方さんの生き様の深さを教えられました。

1903年(明治36年)鍛冶職人の家に15人兄弟の第六子として出生。長島小学校卒業後、18才の時父が鍛冶屋を廃業し、青森地方裁判所の給仕となりましたが、好きな絵を書く時間を得るため退職。その後は親友の松木満史、古藤正雄、鷹山宇一達と洋画グループをつくり、後に知事となる東奥日報の竹内俊吉

氏に認められ、22才で上京。その後の実績はみなさんご承知の通りです。



作品をつくること、他の人に思いを伝える物を生み出すこと。思いがあっても技量がなければ作れない。だから学び続ける。その原動力はつくる喜び。もちろん一人で芸術性と追求することと、企業として存続しながらの製作には違いがあります。それでも、ものづくりを通じて思いを伝えるということは、私たちの会社にも通じます。

その上で志功さんが若い時から一気に世界を目指す高い目標を持っていたこと。そのための毎日の精進の凄み。いっぺんにはうまくいかなくとも、やり続ける希望をもって進み抜く。内に秘めた静かな製作態度と外に向けて悲しみを見せず朗らかに振る舞う態度。棟方志功さんの偉大な人格を知ることができて、おおいに励まされ勇気づけられました。

(番地常夫)

【柵さく】

四国の巡礼の方々が寺々を廻られるとき、首に下げる、寺々へ納める廻札、あの意味なのです。この札は、一ツツ、自分の願いと、信念をその寺に納めていくという意味で下げるものですが、わたくしの願所に二ツツ願かけの印札を納めていくということ、それがこの柵の本心なのです。ですから、納札、柵を打つ、そういう意味にしたいのです。たいていわたくしの板画の題には「柵」というのがついていきますけれども、そういう意味なのです。一柵ずつ、一生の間、生涯の道標を「ツツつ、そこへ置いていく。作品に念願をかけておいていく、柵を打つていく。そういうことで「柵」というのを使っているのです。この柵はどこまで、どこまでもつづいて行くことでしょう。際々無限に。

「板極道」1964年